

【 実践報告 】

人間福祉学会（島根ブロック大会） 活動報告

広島文教女子大学 人間福祉学会 事務局

I. はじめに

広島文教女子大学人間福祉学会は、教員と卒業生、在校生が中心となり、卒業後の学びの場や情報交換の場の提供を目的として、平成14年に創設されました。

島根ブロック大会は2015年度にはじめて開催され、今年度で4回目の開催となりました。これまでは教員が主導する形で大会を準備してきましたが、今年度は、島根県在住の卒業生による企画・運営となり、1期生から在校生まで幅広い参加者のもと、これまで以上に充実した大会となりました。

本年度は第1部に「福祉現場で働き続けて今振り返って思うこと」というタイトルで、主催者たちの希望により、蛭江紀雄先生にご講演いただきました。

第2部では、1期生・2期生の企画・運営による意見交換会を開催しました。続く第3部として情報交換会、第4部には大会総会を実施しました。本稿では、主に第1部・第2部の概要を報告します。

II. 活動報告

1. 大会の概要

(日 時) 平成30年9月15日(土)～16日(日)

(場 所) サンラポーむらくも

(参加者) 32名(卒業生14名, 在校生3名, 教員13名, 一般2名)

2. 第1部 報告

(講演者) 蛭江紀雄先生

(テーマ) 「福祉現場で働き続けて今振り返って思うこと」



(1) 何故福祉の道を選んだのか

「少しでも、意味ある人生を生きたい」、「意味の感じられる仕事につきたい」との思いが、蛭江先生が福祉の仕事を選ばれた根底にあることが伝わるお話でした。

蛭江先生が歩んで来られた時代は第二次世界大戦後、日本が高度経済成長に突入しようとする真っ只中でした。戦争中、ご自身は疎開の経験もされています。また、日本が敗戦し、生活のあらゆる分野で既存の価値観が崩れていく中、ご自身も経験された貧困の中での生活—その延長上に福祉の仕事があったとのお話でした。蛭江先生の根底には、自分が望むような人生を生きるためには、福祉の世界に身を置かなければならないという思いと、常にご自身を律していく姿勢を貫こうとされる強い意志があるのだと感じさせられました。

蛭江先生の人生の転換期には、常に多くの人び

は、「その時どきで、自分が身を置いている場から必ず何か得られるものがあるのだ」と前向きに考えることが大切だとアドバイスをいただきました。



大学を卒業し、働きはじめたばかりの15期生たちは、上司に自分の思いが届かなかったり、また、経験の浅さから悔しい思いをしたり…といった話が出されました。これに対して、13期生が現場に入ったばかりの時期や2年目に迎えた苦しい時期の経験、そして、それらをどのようにして乗り越えていったのかについて話していました。比較的近い年代であるからこそ、自分のこととして共感し、アドバイスできることが多かったようです。

それぞれのグループには先生方も参加しており、立場の違いを明確にしながらも、互いに学びあい、支えあう様子が見て取れました。



分野別の意見交換会では、3～4年目でぶつかる「壁」について、経験を積んだ卒業生からアドバイスする場面が見られました。就職したばかりの卒業生は、今後の仕事への取り組み方への見通しを持つことができたようでした。逆に、就職して

間もない卒業生から、新鮮かつ本音を交えた意見が多く出され、経験を積んだ卒業生が初心に戻って自らを見つめ直す機会も多かったようです。同じ職種ゆえに、より深い理解や共感が生まれる機会となりました。もちろんそれだけではなく、同じ職種ゆえに、話し合いの中で自らの「ゆずれないもの」へのこだわりを表明するなど、自らへの気づきもより深いものとなりました。

4. 第3部および第4部 報告

最後の第4部では、今回の大会の総括を行いました。運営や準備の方法、役割分担など、今後の人間福祉学会島根ブロック大会をより充実したものにしていくための具体的な意見交換が行われました。また、広島で開催される大会に向けて、多くの示唆を得ることができました。



Ⅲ. さいごに

今年度で4回目を数える人間福祉学会島根ブロック大会ではまず、蛭江先生から福祉の原点を学び直す機会を与えていただきました。お話を聴く中で、参加者はそれぞれの原点を見つめ直し、今後福祉の専門職としてどうあるべきなのか、どうありたいのかについて改めて考えるきっかけとなりました。

第2部の意見交換会では、時間や分野を超え、卒業生のつながりが生まれていく様子がとても印象的でした。このような場を企画・運営していただいた1期生と2期生の皆さんには心より感謝いたします。このつながりを今回だけに終わらせず、

今後も活かしていくような機会をもっと提供していきたいと感じさせられました。これからも卒業生からのアイデアを積極的に取り入れ、事務局がバックアップするかたちでさまざまな企画を実現していきたいと思っています。ご協力のほどよろしくお願いいたします。